パラ五輪種目「ボッチャ」の用具購入

横浜市立本町小

「ボッチャ」という競技を知っていますか？

赤や青のボールを投げたり、転がしたりして、白の目標ボールにどれだけ近づけられるかを競います。体に障害のある人のためにヨーロッパで考案されたスポーツで、2020年の東京パラリンピックの公式種目にもなっています。

東京オリンピック・パラリンピックまで500日と迫った3月12日の朝、横浜市立本町小学校(小澤好一校長、566人)で、PTAから児童へボッチャの競技用具一式が贈呈されました。

本町小は横浜市から「オリンピック・パラリンピック教育推進校」に指定されていて、アスリートたちと交流したり、子どもたちとPTAが一緒になって「東京五輪音頭2020」に取り組んだりしています。中でも6年1組は、総合学習の時間に「本町オリパラ盛り上げ隊」としてオリンピックやパラリンピックに関する様々なことを調べ、街頭インタビューなどにも挑戦してきました。

ボッチャのことも知りました。昨年12月には横浜市から用具3セットを借り、6年1組の子どもたちが手分けして学年ごとにやり方を教えました。

授業参観日にはお母さんやお父さんにも体験してもらいましたが、この時は手元に用具が無く、ガムテープをぐるぐる丸めて代用しました。「やっぱり本物が欲しいね」という子どもたちの思いにPTAが応え、ベルマークによる購入が実現しました。

PTA学年委員会の一宮均さんと柴田智代子さんから、6年1組の畑山歩夢くんがボッチャの用具を受け取りました。畑山くんは「正式ルールで実際に体験したり、体験してもらったり、多くの人にオリパラに興味を持ってもらう事ができました。全校で集めたベルマークで買ってもらったボッチャです。本町小学校で大切に使いましょう」と全校児童に呼びかけました。

6年1組はこれで卒業ですが、小澤校長は「子どもたちとやってみたいという保護者の声も聞こえてきます。きっと引き継ぐ子どもたちが出てくると思います」と話してくれました。畑山くんも「面白くて、障害がある人でも誰でもできる。チームの団結が大事で色んな力が付く。ボッチャの楽しさを本町小学校の外にも広めて、パラリンピックの観戦を楽しくしたい」と張り切っていました。

㊤PTAの一宮均さんからボッチャ用具を受け取る畑山歩夢くん
㊦贈られたボッチャの用具一式

「人の役に立ち隊」結成してマーク寄贈

長野・飯田市立鼎(かなえ)小の5年1組

長野県の飯田市立鼎小学校（本村栄次校長、児童699人）5年1組（現6年1組）の皆さんが「人の役に立ち隊」を結成、ベルマークを寄贈してくれました。

総合的な学習の時間で人の役に立つ活動をすることになり、昨年6月から計画を立て始めました。具体的に何をしようかと話し合ったとき、ある児童がベルマーク集めを提案しました。とはいえ、ベルマークってそもそもどんなものか、どうやって集めるのか……疑問がたくさん浮かびました。

財団のHPを見て研究し、被災地に寄付できる「寄贈マーク」という形を選びました。マーク集めは全校に協力をお願いし、分担を決めて各クラスに説明しに行きました。お手製の回収箱を置きました。最後の課題は財団へのマーク送付。社会勉強も兼ねて自分たちで問い合わせの電話をかけました。

3月、16767.3点のマークと、各々の思いを込めたお手紙が財団に届きました。マークは協賛会社別に仕分けてありました。5年1組「人の役に立ち隊」の皆さん、本当にありがとうございました。皆さんの思いはベルマークを通して被災地に届きます。

全校児童20人、50年かけ50万点達成

北海道・西中音更小学校

北海道・十勝地方の音更町立西中音更(にしなかおとふけ)小学校（山本裕之校長）が1月に累計50万点を達成しました。児童20人という小規模校ですが、ベルマーク運動に参加した1969年から50年かけて、地道に点数を積み上げてきました。

広大な十勝平野の中ほど、帯広市の北に位置する音更町。ジャガイモ、小麦、豆、ビートなどの畑作や酪農が盛んな開拓地です。「来年、入植90周年になります」と山本校長。1931年に創立した同校の児童数は、1959年の219人をピークに減少をたどり、昨年度は18人。それでも、この4月に6人の1年生が入学し、全体の児童数が2人増えました。

活動の主体はPTA文化部。同校に児童が通う10世帯すべてのお母さんで構成されています。同小がベルマークを集めていることは有名で、地域ぐるみで収集に協力してくれているそうです。「マーク1枚1枚はわずかな金額ですが、子どもたちのために有益なものを買って、教育活動に生かす。その一心です」と山本校長。

50万点は、子どもたちへの熱い思いと、学校・家庭・地域の深い絆があってこその積み重ねでした。

昨年の遠足のひとコマ。全校児童18人で、はい、ポーズ！

アフガニスタン、17軒目の寺子屋が建設開始

日本ユネスコ協会連盟カブール事務所長が現状報告

「アフガニスタン寺子屋プロジェクト」を進める公益社団法人日本ユネスコ協会連盟のカブール事務所長、ヤマ・フェロジさんが4月18日、最近の情勢を報告してくれました。寺子屋プロジェクトはベルマーク財団が友愛援助のひとつとして支援しています。

日本ユネスコ協会連盟は2003年から女性を主な対象に読み書きを教える寺子屋活動をはじめ、治安情勢の厳しい中、2017年までに1万5千人余りの卒業生を出しました。今年4月には17軒目の寺子屋の建設が始まっています。現在、寺子屋で学んでいる15歳のファテマさんは「識字が身についてとても嬉しいです。日本の皆さんに感謝しています」といいます。

「識字率を上げることが、女性の地位を向上させ、国が貧困から脱出する基礎になる」とヤマ所長。アフガニスタンの今後に、私たちも注目していきたいと思っています。

寺子屋の識字クラス。机には日本ユネスコ協会連盟の文字が